

日米医学医療交流財団 留学助成

B 項 研修報告書 (平成 21 年度 助成者)

作成日 平成 21 年 12 月 28 日

氏 名	上原 由紀
研修先機関名	Division of Infectious Diseases, Mayo Clinic, Rochester, MN USA
研 修 期 間	9/28/2009-12/24/2009
現在所属機関名	順天堂大学医学部
分 野	感染制御科学／総合診療科
役 職	助教

今回私は日米医学医療交流財団の留学助成を頂き、米国ミネソタ州にある Mayo Clinic において合計 13 週間の研修を行った。研修の目的は、米国内でも有数の教育病院である Mayo Clinic において Division of Infectious Diseases の Fellowship を見学・体験し、日本の、とくに大学病院における効果的な感染症専門研修プログラム構築に役立てることである。

Education Chair である Dr. Abinash Virk と相談のうえ、Fellowship 全般を知るために、一般感染症、ICU/CCU、整形外科感染症、移植感染症、腫瘍／血液内科の各コンサルテーションチームをローテーションし、Fellow と共に診療に参加させて頂いた他、Fellowship に組み込まれている微生物検査室や感染対策室、Travel Clinic についても見学期間を与えて頂いた。Fellow による Research の成果発表が行われた米国感染症学会 (IDSA:10 月末、Philadelphia) にも参加することが出来た。最終的には、Dr. Virk の指導のもと、順天堂大学の実情をふまえて具体的な Fellowship program の計画立案を行った。

Mayo Clinic の ID Fellowship は 3 年間のプログラムである。1 年目は途中 2 ヶ月の微生物検査室研修および 1 ヶ月の感染対策室／Travel Clinic 研修があるが、その他は通年で各コンサルテーションチームをローテーションし、Consultant の指導のもとで臨床経験を積む。2 年目は全体が Research に充てられており、1 年目に計画立案した Research を行う。3 年目に IDSA あるいは ICCAC (国際化学療法学会) において Poster presentation による成果発表が行われるが、研究の進捗が早い Fellow の中には 3 年間で複数の原著論文を peer-reviewed journal に掲載する人もいようである。3 年目は半分が臨床コンサルテーションチーム研修、残りの期間は elective とされており、研究に充てる人や興味のあるコンサルテーションチームの研修を追加する人などがいる。3 年間で少なくとも 250 例の入院症例を経験することが可能である。外来は 3 年間を通じ週一回半日行い、HIV の患者を合計 20 名以上継続的に診療する他、他科からの外来コンサルテーションも受けている。外来も入院と同様、Consultant が常に控え室にいて Fellow とともに診察結果を吟味し、結論を出すようになっている。

最も見習うべきことは、いつまでに何を達成するかという専門研修の目標が極めて明確にされており、それを達成するためのステップもまた大変良く構築されているという点である。これは米国の専門研修制度が整備されていることにもよるが、日本の大学病院のみならず、教育病院全てにおいて整備が遅れている部分ではないかと思われる。各病院が独自のプログラムを作るのも良いが、今後学会や政府組織などを通じた全国的な協調が必要と考えられる。また、Fellow にきちんと給料が支払われ、アルバイト等をせず研修に集中できることや、完全な Consultant のバックアップのもとに安心して研修を行えるのも大きな利点である。Fellow 達の満足度も非常に高い。

今後の展望として、まず学内で指導医クラスによる他科からの感染症に関する Consultation の仕組みを確立し、教育的症例が十分に集まるようになってから、今回計画立案した Fellowship program を開始したいと考える。また、他の教育病院とも連携・協調し、国内の多くの病院で必要十分な Training が行えるように教育環境の整備をしていきたい。